清川雅充「精神分析的心理療法を適用したパニック障害の一例」について

久慈　要（くじ　かなめ）
国籍：日本　住所：東京都武蔵野市西久保
勤務先：東京都武蔵野市西久保３丁目９番５号　株式会社アイ・ブレーンズ
役職：代表取締役　開発部　SE・コンサルタント

評点：　－２

要約：清川雅充氏は、精神分析的心理療法をパニック障害のクライアント（Cl）に適用し、効果があったと報告している。確かに、Cl の経過はよかったと考えられる。しかし、氏の報告からでは、精神分析的心理療法が体系的に Cl に適用され、確かに、併用された他の療法ではない、精神分析的心理療法が効果があったのか、読み取れないように思われる。また、氏は、ご自身の解釈を含む、療法の行為を理論的に定式化して考察したと言われている。しかし、報告のどの表現が、理論的な定式化なのかが理解できない。氏は、この報告が、精神分析的心理療法のパニック障害への有用性を報告した論文の追試になっている、と主張されている。その論拠を、氏の考えておられる精神分析的心理療法を用語としてあてはめられる場面があり、Cl の経過がよかったということに求めておられるが、それは果たして妥当か疑わしい。論文としては、もう少し、整理し、論理性を付与することが求められると思われる。

Abstract:Mr. Masamitsu Kiyokawa reports a course of psychoanalytically oriented psychotherapy for panic disorder, and he got the good results. He insists that the course of psychoanalytically oriented psychotherapy for panic disorder worked effective. Sure, there is no doubt that the Cl got well, I agree. But it is doubtful or not clear that Mr. Kiyokawa applied the course of psychoanalytically oriented psychotherapy for panic disorder systematically, or it is also doubtful or not clear that the Cl's good results come from the course of psychoanalytically oriented psychotherapy for panic disorder and not from other therapeutic actions also applied. Besides, he says that he discussed the significance of psychoanalytical interpretation made by himself and other techniques by means of theoretic formulation of this therapeutic course. Yet I can't understand or distinguish which expressions are such theoretic formulations. Mr. Kiyokawa also claims that he made an additional test or verification for the article reporting the effectiveness of a course of psychoanalytically oriented psychotherapy for panic disorder. This claim is based on his having applied terminologies of psychoanalytically oriented psychotherapy to this case and the fact that the Cl got well. I dare say it is difficult to

accept this claim.　Consequently, I'd like to request Mr. Kiyokawa to rewrite and put in order this "article" or case report to be more logical and having more clear reasoning.

所見：

この症例報告で、清川氏は、精神分析的心理療法を Cl に適用したと主張されている。確かに、清川氏の考えておられる、精神分析的心理療法が、適用されているかのような記述があり、Cl の症状は、記述からは、疑いなく、快方に向かったことが読み取れる。

しかし、精神分析的心理療法が Cl に確かに適用され、それが効果を上げたかどうかが、この症例報告で読み取れるのか？　筆者には、大変疑問なのである。

論文の構造としては、【はじめに】で、論文の意図が説明され、【臨床素材】で、Cl がどういう人で、どのようにして来院したかが説明され、その後、面接の経過が記述されている。それから、【考察】があり、清川氏の考えや論拠、参照文献が述べられ、【おわりに】で、この論文執筆によって伝えたかった事柄がまとめられている。

ただ、筆者には、提示されている素材が清川氏の主張されたいことを伝えるには不足していたり、清川氏の主張陳述の展開に論理的に無理があるように思われるのである。

清川氏の論文執筆意図は、【はじめに】に、「パニック障害・不安障害の心理療法には，認知行動や暴露療法が推奨されて」いるが、「精神分析的心理療法に関しては，有用性のエビデンスが報告されていないのみでなく」「報告自体あまりみられない」。しかし、精神分析的心理療法をパニック障害の治療に適用した報告もないことはないので、今回、清川氏が、「病理が重いと考えられるパニック障害の精神分析的心理療法を経験し，良好な改善が見られた」ので、「解釈を含めたどのような介入に効果があったのかを理論的に定式化して考察した。そして，Ablon ら(2006）の報告に見られたパニック障害に対する精神分析的療法の有用性を，症例報告を用いて追試した。」とある。

筆者には、「理論的に定式化して考察した」のは、どういう部分か、「パニック障害に対する精神分析的心理療法の有用性を，症例報告を用いて追試」とはどういう作業か、が疑問である。おそらく、「理論的に定式化して考察した」のは、【考察】の部分に記述されているのであろう。しかし、それは、筆者には、明確ではない。理論的に定式化された記述はどこにあるのか？　「パニック障害に対する精神分析的心理療法の有用性を，症例報告を用いて追試」するには、精神分析的心理療法として、このようにして、このようなことが起き、その結果、このように効果があった、ということが明確に述べられていなければならないと筆者は考えるが、それもうまく読み取れない。　清川氏の記述では、「診断や症状形成のメカニズムなどについての力動精神医学的な理解が“仮説”，そして，治療過程が“検証”の過程に相当」とあるが、それは、精神分析的心理療法による Cl の状況、症状の

見立てが、仮説で、Cl が快方へ向かう過程、結果が、検証、ということなのだろうが、仮説の内容が、あまり、明確に述べられているように見えない。　仮説に相当する、診断や、症状形成のメカニズムが、こうだと考えた、みたいな明確な説明があり、それに対し、こういうアクションをしたので、状況がこう変わったという明確な説明があればよいのだが、そういう記述があまりはっきり見えない様に思う。　それでは、出発点や経過を自分の都合の良い形に「解釈」することになっていないか、という疑念を否定できない。　落語の蒟蒻問答（にわか住職になったこんにゃく屋の主人が旅僧に禅問答をしかけられ、口もきけず耳も聞こえないふりをしていると、旅僧は無言の行(ぎょう)ととりちがえ、敬服するという筋の落語。それぞれ、自分の勝手で都合の良いように解釈するが、つじつまが合ってしまう。）のようになっても、検証できたことになりそうである。　さらに、各種の手法を種々、混合して使っているので、効果がなかったかもしれないものを効果があったと考える、という誤謬を避けられるようになっていない。　というのは、清川氏の論では、Cl は快方に向かったので、検証できたことになるが、種々の手法が使われているので、快方に向かったプロセスに対して、他の方法ではなく、精神分析的心理療法の見立てや、行為が有効であったと言える場合、あるいは、他の方法に加えて、精神分析的心理療法が有効であったと言える場合、のみ、精神分析的心理療法の有効性、有用性が検証できたことになる。　しかし、そこは、やはり、きちんと説明されていない。　この議論の立て方は、よろしくないと筆者は考える。　清川氏からは、本考究会の「質問・寸評広場」を通じてのやり取りで、非専門家でないので理解できないのだろうとか、清川氏は明快に書いているのに筆者に読解力がない、査読者としても不適切では？　と非難されているように感じているが、書いていないものは、読み取れない。　ともかく、以下で、その読み取れない状況や、なぜ、読み取れないと感じるかを、もう少し説明したい。

なお、読み取れることとしては、Cl は快方に向かったらしいということがある。これは、読み取れる。この快方に向かった一つの原因として、清川氏との面接があるようにも感じられる。（実は、ここは断定できるとは言いきれないが、逆に、清川氏との面接が役に立たなかったとか害をなしたと断定する根拠も何もないので、こういう表現を取ることにする。）

そもそも、特定の２者が関わった、１回限りの現象で、もし、こうしなかったら、どうであったか、を、実際に経験することはできないので、心理療法における治療者の働きかけが、Cl に有効だったかは、上述もし、質問・寸評広場でも清川氏が言われていたように、全体の流れの中で総合的に判断されるのであろう。　その意味では、Cl が快方に向かったので、清川氏の働きかけは、有効ではあったのだと考えられそうである。　しかし、清川氏は、精神分析的心理療法以外の手法も併用されている。　面接をし、じっくり話を聞いていくだけで、Cl に良い効果がもたらされる可能性だって、否定できない。

また、精神科の医者から、Cl に、薬が処方されている。それが、Cl の状況改善に効果があった可能性もある。　ただ、清川氏の書かれたものからは、清川氏の Cl とのやり取りも、Cl に対して影響を与えていることは確かではないかと推測される。

なお、河合隼雄氏が、臨床関係の雑誌に寄せられた文章[1]の中で、フロイドの目指したところは、理論では、科学的な理論化、実践は、科学的な理論化というよりは、アートに近いもの、という趣旨のことを述べられているのは、興味深い。

さて、問題は、清川氏の言われる、精神分析的心理療法が、読者にとっても、精神分析的心理療法と考えられるか、そして、それは、清川氏が主張しているように、効果があったのか、であるが、これはどう判定したらよいのだろうか？

というのは、確かに清川氏の記述には、精神分析的心理療法で使用される語彙が使われているのであるが、それが、その表現の必然性ある使われ方なのかが、私には、得心が行かないのである。その点で、そもそも、精神分析的心理療法が適用された症例と言えるのか、が、まず、疑問のように思っている。

次に、仮に、精神分析的心理療法が使われたということになった時、先にも述べたとおり、それが効果を上げたというのは、どうやって論拠づけられているか、それが、私には、清川氏の記述の範囲内では、再び、得心が行かないのである。

清川氏の使っている、精神分析的心理療法の用語であるが、以下のようなものがそれに該当すると思われる。「誘因」、「如何にしてその病気が生じたかという患者の生活の秘密」、「転換傾向」、「抵抗排除」、「抵抗」、「解釈」、「（幼児期への）転移解釈」、「陰性感情」、熟語とは言えないが、「近親姦に通じる，満たされちゃいけない愛情不足や誘惑」、「抑圧された性愛や願望」、など。　ただ、これらを精神分析的心理療法の用語ではない日常表現に置き換えたり（たとえば、解釈を質問、と置き換えるとか）、精神分析的心理療法の述語と取らなくても、書かれていることに変化が無いのではないかと思われる。

筆者は、精神分析的心理療法の専門家ではないが、清川氏も参照しておられる、土居の「精神療法と精神分析」[2]などを見ると、精神分析的心理療法は、Cl と「治療同盟」を結び、Cl の心の内部にあるものを引き出していくと、一時、それ以上進展しないところが出てくる。それが、「抵抗」であり、その一形態で、治療者を、Cl の精神に危機をもたらす人や、願望の対象者などと同一視する、「転移」が起きる。それを、解きほぐすように、「解釈」したりしていくと、症状改善がみられる、というストーリーのようである。

通常の言葉づかいで解釈とは、目の前にあるもの以上の、何らかの読み込み、といった

ニュアンスを伴う表現である。しかし、清川氏の書かれていることを読むと、Cl に単なる質問の言葉をかけるのが、「解釈」、という具合にとれるようにも思えてくる。清川氏の意図が、違う角度からの考え方を提示し、Cl の自己認識を変えていく、ということであれば、確かに、「解釈」と呼べる余地はあるかもしれない。しかし、それなら、もう少し、清川氏が、Cl の状況や内面をどのようにとらえ、どこに気づかせていこうとしたのかが筋道だてて明快に述べられてもよいような気がするが、どうであろうか。　これには、患者のプライバシーが絡むので、「はっきりとは述べられない。」のか？　もし、そうなら、報告者以外には、症例としての十分な追体験も、理解考察も難しいのではないか？　とすれば、こういう症例報告は、報告者が、ともかく仕事しています、と言う以上の意義を持ちうるのか？

「抵抗」についても、書かれていることは、円滑な受診の拒否、という意味では、抵抗だが、精神分析的心理療法の言う「抵抗」は、そういうものなのだろうか？　精神分析的心理療法の重視する「抵抗」は、洞察に達する直前に現れる、すなわち、Cl にとっても重要で大きな影響を持つ認識を意識化する直前に現れる「抵抗」であろう。　そういう「抵抗」があったのか、あったようでもあるし、そこまでいかなかったようでもあるし、それが、与えられた素材からは、読み取れない。

「転移」についても、清川氏がはっきり書かれているように思えない。「愛情不足」について、冗談めかしたやり取りがあったように記述されているが...　「愛情不足」という表現に関連して、治療者である清川氏に向けられた、どのような「転移」があったのか？「転移解釈」という言葉は出てくるが、＜子供の頃にも両親に１人で取り残されたり，置いてきぼりにされた経験ってありますか？＞という質問が、Cl にとって重要な過去の「秘密」なのだろうか？　この幼児期体験の想起で、何が解明され、それで、どんな転移が解消されたのか？　幼児期の出来事と、現在をつなぐのが、転移解釈と呼ばれるのか？　幼児期の出来事なら何でもよいのか？　この幼児期の出来事を特に質問し、想起させたのは、清川氏のどういう意図に基づいてのことなのだろうか？

ここで、清川氏が、Cl の精神構造や状態について、氏のお考えを述べられれば、まだ、明快だったのではないか？

精神分析において、リビドーとか、性的なものは重視されているようである。　たとえば、Cl は、「父が後ろ通る時にも，絶対接触しない。女の子には，こういう防衛があって普通じゃないですか？近親姦の。」と、発言しているようであるが、確かに、これは、若い女の子によくある感情だと聞く。　また、ダンスの話が出てくるが、これも、性の願望に結び付けられている。　しかし、そういうものなのか？　そんなに特別なことなのだろうか？筆者も社交ダンスをやっているが、ダンスをやっている人たちが、すべて、性的願望に動

かされているのか？　このケースでは、ダンスが、清川氏の Cl にとっては特別なものになるのだろうか？　特別なものになることもあるだろう。　しかし、そこの部分の構造的説明はないので、筆者としては、すんなり受け取れない。

清川氏には、上述のようなことを取り上げて、Cl の心の中に何を見ているのか？　そこをもう少し丁寧に書いてほしい。

清川氏の、されたことは、確かに心理療法の面接である。　そして、効果もあったのではないかと推測される。　それに、清川氏が好む、精神分析的心理療法の色付けが、用語の使用によってなされては、いる。　だが、繰り返しになるようであるが、それが実際に精神分析的心理療法という内容になっているのか、現時点の提示された文章からは、明快には読み取れないのである。

清川氏の考察について、検討しよう。

清川氏は、考察の冒頭付近で、「D の語る出来事の性的色彩の強さ」と書かれているが、提示されたやり取りの記録からは、再び、そこは明確ではない。　続けて記述されている解釈に関する記述でも、やり取り記録から読み取れる以上の主張がなされているように、筆者には感じられる。

特に筆者が気になるのは、解釈の意義についての記述である。　清川氏の引用しておられる、土居「精神療法と精神分析」の該当部分(3)を参照すると、洞察が得られた後の Cl の笑いについて、「ここでの笑いは、自分のおかしさを笑うのではなく、むしろ自分のおかしさが超克された故に、その瞬間いわば自らが救われている故に、笑いが溢れるのである。すなわちそれは喜びの笑いなのである。」とある。　しかるに、清川氏は、氏の「解釈」提示後の Cl との会話が、「笑い話風になる事も多かった」から、（Cl である）「D の筆者への反応は，土居の論と同じ」と断じられているが、筆者には、この記述はもとより、それを補足するやり取りを見ても、提示されたやり取りだけでは、そのように読み取れない。清川氏の報告を読んだ印象では、土居の論じている笑いは、清川氏と Cl とのやり取りでの Cl の笑いとは、異なるように感じられるのである。

この査読文を書くにあたって、症例報告とはどういうものか、いくつかの雑誌(4)や書籍(5)を参照してみた。　見た範囲では、やり取りの様子は一応追体験できるものであったし、報告者の意図もそれなりに説明されていた。　また、その報告に対するコメントは、同じ臨床家として、自分ならこうする、のようなコメントもあり、興味深かった(6)。　しかし、清川氏の書かれているものは、素材も解説も、ものたりなく、そういう意味では、もう少し、氏の意図や説明も、生のやり取りももっと書いて欲しかった。　氏の書かれたものは、本考究会の投稿規定の字数の制限には、まだまだ遠い。書く余地は十分にある。

症例報告とは、読む人にもある程度の追体験をさせ、参考になるように書かれるものではないのか？　そして、得られた結果や状況について、勝手な読み込みをしていない（これは、時として、証明が必要なことでもある)、誰が見ても書き手の主張が納得できるように書かれるのが論文であろう。清川氏の書いたものは、そうなっていないと思う。

清川氏の書かれたものを見ると、もっと書いていただきたいことが、あまりはっきり書かれていなくて、書かれた意図がよくわからないことが書かれているようにも感じられるところがある。　バスと bath のやりとりも、本人は、あんまり関係ないんじゃない、と首をかしげる風だったのなら、なぜ、書かれているのであろうか？　誘因や心因について分かったとか分からなかったとか、書かれているが、その部分は、もう少し詳しく、わかりやすく、はっきりと書いて欲しいと思うのは私だけだろうか？　また、本人は誘因ではないと言ったという、ダンスの話などは、一見誘因に思われるが、とあって、関係ないのかと思えば、性的な抑圧の一つと考えた、とある。どういう位置づけなのか、Cl にとって特別なことがあると考えたのならその辺をもう少しわかりやすく、というのは、既に書いたとおりである。　上述した、笑いのことについても、笑い話風、と言いながら、自己評価では、うまくいっているとしているのが、不可解である。　事実と違う強引な我田引水的評価を清川氏がしているのではないかという印象を強めてしまう。

以上より、清川氏の、意図、意気込みに、書かれた内容が、ついていっていないと断じたい。もっと書き込みが必要と考える。　なお、考察部分では、清川氏が参照、共感された文献、論拠がいろいろ上がっている。　清川氏が、「理論的に定式化した」と主張されないなら、違和感は、かなり薄れるものと思う。　精神分析的心理療法にしても、適用して効果があったかどうかは、もう少し論証が必要であろうが、「精神分析的心理療法の適用を試みた」、「精神分析的療法の観点も活用した」、程度の表現なら、やはり、違和感は減るものと思われる。

参考文献

⑴ 河合隼雄「事例研究の意義」臨床心理学（金剛出版）Vol.1 No.1 Jan. 2001 pp.6-7
⑵ 土居健郎「精神療法と精神分析」金子書房 1961
⑶ 土居健郎「精神療法と精神分析」金子書房 1961 pp.171-174 第８章　洞察の出現　(2) 洞察出現の心理
⑷ 「臨床心理学」（金剛出版）Vol.1 No.1、Vol.2 No.1、Vol.6 No.1、「精神療法」（金剛出版）Vol.34 No.5、Vol.36 No.1、Vol.36 No.6
⑸ メラニー・クライン（山上千鶴子訳）「児童分析の記録 I (1961)」誠信書房 1987 メラニー・クライン著作集 6
(6) 木村宏之「木村(哲)論文との対話」精神療法（金剛出版）Vol.34 No.5 2008 pp.592-594